イギリス絶景スポットの宝庫・コーンウォール地方を征く

長く続いたコロナ禍の影響で人々の旅行の仕方にも変化が訪れている。特にロックダウン中、諸外国の国境が閉ざされたり入国制限が課されたりしたことから、旅行先は自ずと国内にシフトした。もうひとつは自然回帰である。空気の良い、自然が豊富な郊外の人気が高まり、これに合わせてキャンプやサイクリング、屋外スポーツの市場も拡大した。入国規制がほとんどなくなった今も国内旅行は人気で自然回帰の風潮も衰える兆しはない。

8月のバンクホリデーで家族旅行を考えたときにまず浮かんだ行先は国内だった。ヨーロッパの都市へのシティーブレークでもよかったのだが、国内でまだ行ったことがなく絶景スポットがいくつもあること、海や山に近くて自然が味わえるところということから、イギリス南西部のコーンウォールに決定した。さらに、これまでにやったことがないことを経験しようと、往復を列車ですることになった。

コーンウォール地方はブリテン島の南西部に位置し、ランズエンド（「地の果て」）と呼ばれるその先端は大西洋につながるケルト海に突き出ており、英国本土の最西端となっている。今回は公共交通機関だけを使ってロンドンから2泊3日での行程で訪ねる。ロンドンパディントン駅からコーンウォール地方の入口ペンザンス駅までは距離にして253マイル（約407 km）、約5時間の行程である。座りっぱなしで5時間の旅は少々大変であるのと、昼間の時間を移動に使うのはもったいないということで、夜行列車を利用することにした。グレートウェスタンレールウェイ（GWR）が運行するナイトリビエラという名の夜行列車だ。このナイトリビエラは往復ともに月曜から金曜と日曜の運行で、普通の座席のほかキャビンと呼ばれる寝台車がある。3日間の連休を有効活用し、かつ週明けに無理が無いようにと、金曜の夜行でロンドンを出発し月曜の夕方に普通列車でロンドンに戻るという計画である。

今回の旅の目的は、最西端のランズエンドからの眺め、岸壁に造られた野外劇場「ミナックシアター」、イギリスのモンサンミシェルともいわれる「セントマイケルズマウント」、南西イングランド屈指のリゾート地セントアイヴスだ。コーンウォールの主な見どころを車中1泊現地2泊の合計3日で網羅する。必要最低限の着替えと洗面用具のほか、お天気に恵まれた時のために水着とピクニックシートも持参することにした。

金曜日、定時で仕事を終えてからパッキングを始めシャワーや食事までしても、列車出発時間の23:45まで余裕がある。キャビン利用者は駅のファーストクラスラウンジも利用できるので早めに行ってゆっくりしてもいいし、22:30から乗車できるので早くチェックインしてキャビンで休むのもいい。各キャビンの鍵はホテルの様にカードキーになっている。キャビンの半分はベッドが占有していて小さいながらワードローブも付いている。開閉式のテーブルの下に洗面用のシンクがあるがトイレは共用だ。キャビン利用者専用のラウンジカーではアルコール飲料も販売していて、ナイトキャップを一杯やりたい人、夜更かししたいけれどキャビン内ではくつろげないという人にぴったり。キャビンのベッドは驚くほど快適で朝までぐっすり眠れた、と言いたいところだが、座席であれば気にならない列車の揺れが横になると意外に強く感じられ、結局眠りについたのは午前

2時過ぎだっただろうか。朝7時過ぎ、係員が運んでくれたパンとコーヒーの朝食をとっているうちに列車は海岸線に出て、海の向こうに朝日に輝くセントマイケルズマウントが見えた。ペンザンスはもうすぐだ。

ペンザンス到着後、そのまま駅前のバスターミナルに向かう。ローカルバスのほかオープントップの観光バスも同じ1日乗車券で乗り放題という嬉しい仕組みになっている（2022年10月現在1日乗車券5ポンド）。タクシーもあるのだが、せっかくなのでこの乗り放題バスですべての行程を移動することにした。

1日目の目的地はイギリス本土最西端のランズエンドとミナックシアターだ。オープントップバス「ランズエンドコースター」で一路ランズエンドへと向かう。このバスはペンザンス、ランズエンド、セントアイヴスを巡回していて逆回りもある。往復とも1時間に1本の運行なのでバスの時間に合わせて行動することになるが、復路の時間さえ覚えておけばむしろ効率よく行程をこなせる。ペンザンスからランズエンドへの道のりは約1時間。ちょっとした丘や林を通過するとずっと緑の平原が続く。到着後、平原を少し歩くと吹きっさらしの岸壁の上に小さな白い建物が見えてくる。イングランド最西端の「First and Last House and Cafe in England」だ。一方、ランズエンドの有名な白い標識にはすごい人だかりがしていて、よく見ると並んで撮影するのは有料だと知りがっかりした。大西洋からの強い波風に形づくられたゴツゴツの岸壁が続くこの辺りは、海辺の遊歩道をぐるりと散策できる。

次にランズエンドからペンザンス行きのバスに乗り約20分でポースカーノに到着。バス停から標識に沿って徒歩約15分でミナックシアターの入口に着く。一見、古代遺跡のようにも見えるこの石造りの野外劇場は、1人の英人女性によって50年もの歳月をかけて造られたもので、舞台の向こう側に海を一望する素晴らしい眺望だという。残念ながらすでに入場券は完売で入場は諦めていたが、「反対側の岸壁の上から見えるよ」との係員のアドバイスに従い、60センチほどの幅の遊歩道を行くこと約20分。ようやく岩の上から豆粒ほどの大きさのミナックシアターと、地中海ばりのエメラルドグリーンのビーチが複数あるのが見える。そのまま一目散に下りて行き、一番近いポースカーノビーチで水着に着替えて海に飛び込んだ。シャワーはおろか何の設備もないビーチだが、さらさらの砂地と極上の水質は地中海にも負けないクオリティだ。

私たちの宿はペンザンスから約2キロ西にあるニューリンという街にあった。レストランの一部を改装したいわゆる民宿で、ラウンジや朝食エリアのほか全6室というこじんまりした施設だ。オンスイートの部屋の窓からは、たくさんのカラフルな漁船が泊する港が眺められた。

コーンウォールと言えばやはりシーフードということで、夕食には宿の主人お勧めの地元の人も並ぶというシーフードレストランへ。店に着くとすでに20人以上の列ができていて、45分並んでようやく席につく。新鮮なシーフードはタパス風の盛りつけで、何種類も頼むことができ、とても満足いくものだった。

2日目、あいにくの曇り空の下セントマイケルズマウントに向かう。ペンザンス駅からバスで15分ほどのところにあるセントマイケルズマウントは、マウンツ湾に浮かぶ島で干潮時のみ陸続きになる。私たちが訪れた時には石畳を歩いて渡れた。島はお城と礼拝堂、壮大な庭園から成り、17世紀から最近まで貴族が所有していたという。その後ナショナルトラスト（歴史的名所や自然景勝地の保護団体）に寄贈されここが管理している。建物や庭の見学には入場券が必要だ。大天使ミカエルに因む名前やレイライン上の立地などからパワースポットとも言われているが、朝陽や夕陽を受け沖合に浮かぶ姿は確かに神々しい感じがする。

最終日は、コーンウォールの半島の北側にありアーティストも多く住むというリゾート地セントアイヴスへ。ペンザンス駅からバスで約1時間のセントアイヴスは、コーンウォールのどこよりも都会的な印象だ。ハイストリートにはおしゃれなブティックやアーティザンのパンやケーキのお店、ヨーロッパ風のレストラン、カフェやバーが軒を並べ、いわゆるベタのお土産屋というものがない。

丘陵地帯にある住宅エリアでは、迷路のような小路に白壁のスタイリッシュな家が連なり、どこか外国の雰囲気が漂う。賑やかな中心部からセントアイヴス北端の「アイランド」と呼ばれる半島に向かう。半島先端の丘に登ると両側にエメラルドグリーンのビーチが広がっているのが見渡せる。丘の上にあるセントニコラスチャペルはケルト風の小さな石造りの礼拝堂で、空と海を背景に自然と融合した姿が素晴らしい。

そうこうしているうちに、16:15発のロンドン行き電車の時刻が近づいてきたので、セントアイヴスを後にしペンザンスに戻る。ロンドンまで5時間15分の列車の旅をどのように過ごそうかと心配だしていたが杞憂に終わった。車窓を流れゆく景色を見ながら列車に揺られ、心地よい疲れでウトウトしているうちにパディントン駅に着いた。3日間という限られた時間で、夜行列車を使って効率的に、バスを使って経済的に、ウォーキングをたくさんして健康的に憧れのコーンウォールを最大限に楽しめた旅だった。敢えて列車と公共交通機関で回ったのも新鮮でいい思い出となった。

まだまだあるイギリス国内の絶景スポットを発見する旅、イギリス在住の方にも日本から来られる方にもお勧めしたい。

JTB Europe Ltd. Mybus UK　北出泉子

コーンウォール地方のおすすめ観光スポット

①ランズエンド
②ミナックシアター
③セントマイケルズマウント
④セントアイヴス

コーンウォール地方の地図は、このリンク(First Bus）2ページ目をご参照ください。

日本クラブ会員様へのこちらの特別割引のご案内もございますので、是非ご覧ください。

発行： 日本クラブ会員サービス･イベント委員会
原稿： マイバスUK Email: info_uk@mybus-europe.com, HP: www.mybus-europe.jp
日本クラブ TEL: 020 7921 9490 Email: jimukyoku@nipponclub.co.uk HP: nipponclub.co.uk